

タイトル	ペーター・ハントケ『森の「あれあれ」を運ぶルーシー』(1999年)について
著者	瀬川, 修二
引用	北海学園大学学園論集, 133: 17-27
発行日	2007-09-00

ペーター・ハントケ『森の「あれあれ」を 運ぶルーシー』（1999 年）について

瀬 川 修 二

2000 年にオーストリア児童文学賞を受賞したハントケのこの作品¹⁾はルーシーという名の女の子を主人公として、その父と母の三人家族の物語である。この作品とハントケの実際の人生と関連づけるならば、ハントケは 1990 年以降、パリの南西郊外の町、シャビィユに住み、翌年、女優のソフィー・セニン（1995 年、ハントケと正式に結婚）との間にレオカルディという娘が生まれているが、この娘のためにこの作品は書かれたと言われている²⁾。まずはこの物語のストーリーを追ってみよう。

ルーシーはある大きな首都の郊外の庭のある小さな家に住んでいる。父親は庭師、母親は刑事警察署長をしている。母は美しく、強く堂々として頼りがいがあり、ルーシーは母を尊敬している。しかし、一方、父は好きになれない。父はいつも爪が汚れていて、不潔で、また、そばにいてもそこにいるかどうか感づかれないほど存在感が薄い人間である。ルーシーがまだ小さくて連れ添いが必要だった時、父はルーシーを助けようとするといつも体を震わせる癖があった。ルーシーを助けようとする以外でも普段、朝晩、夏も冬も、座っていても立っていても、食事の時も読書の時も体が震えだす。ルーシーが父にどうして震えるの？と尋ねると、父は二つの原因があると答える。第一の原因として父は昔、祖父母と一緒にいつも国から国へと逃げ、逃亡者の生活を送っていたことを述べ、第二の原因として父の姓が震える人間を意味しているためだと説明する。父は結婚して母の姓を名乗ることで自分の以前の姓から解放されたが名前が相変わらず、邪魔をしていると言う。

父は誰にでもわかる簡潔な文で話すことが出来ず、いつも回りくどく、長々と話す。話す言葉だけでなく、その行動も時々、不可解である。すでにきれいになった庭をまた掃き始めたり、一度探したポケットをまた探したり、突然、意味もなく後ろを振り返ったりする。

父は毎日、森へ出かけ、毛虫やカタツムリを服につけて汚い姿で家に帰ってくる。見分けがつかないほどゆがんだ醜い姿でルーシーの部屋の敷居に立ち、ひどい臭いを発散させる。このように父と母を比較すると夫婦として全く釣り合いが取れないように見えるが、しかし、ルーシーはこの二人と一緒にいることを望み、両親が一緒にいる姿を好ましく思う。母は美しさを父に分け与え、父を光で覆う。二人は不釣り合いに見えてもルーシーにはすばらしいカップルに思える。二人がケンカしたときルーシーは二人を仲直りさせる。

ルーシーは森のはずれの自分の家が好きになれず、首都の海岸沿いの家に住みたいと思っている。近くの森も岩、洞窟、滝がないために好きになれない。ルーシーが好きな場所は木々がなく、短い草とむき出しの岩しかない高山である。樹木がまばらになり、高山の広い視界が開ける境目が好きでルーシーは頂上に向かって飛び跳ねながら突進する。家族三人で高山に出かけた時、母は人が変わったように、小屋に閉じこもり、かまどの火のところに縮こまって、しわだらけの老女のようになる。日頃、警察署長として活躍している場所から離れ、無線の周波数の届かない場所で母は元気を失い、高山の日々は母には耐えがたいものになる。

一方、父も高山ではどうしてよいかわからない。森では猟師のように歩き回り、立ち止まり、あらゆる方向を見ながら歩き回るが、木がなく、岩や草以外何もない荒涼とした高山ではどこを見てよいかわからず、途方にくれる。

父はその後、ルーシーを誘って高山に連れて行こうとするが、それはルーシーの求めている高山ではなく、単なる森の延長でルーシーはがっかりする。その埋め合わせとして父は自分だけが知っている森の秘密の場所にルーシーを連れて行く。森に生えている名づけられない物たち、「あれあれ」がある場所を案内する。

父は以前、母がルーシーを妊娠している時、母と一緒に子供ベッドを買うために町の店で待ち合わせるが、その時、この「あれあれ」を帽子に入れて母の前に姿を現す。母はそれを見て驚き、早産してしまう。

それ以来、父は森の「あれあれ」がまさしく、ルーシーの出産を早くしたと考え、森の「あれあれ」を探すことに夢中になる。夜も冬も探し続ける。母は最初、父の好きなようにさせ、「あれあれ」を味見もしてみるが、しかし、やがてそれらは形や色を失い、腐り、悪臭を放ち、鼠の糞のように黒く収縮し、カビで覆われる。「あれあれ」は家中に積み上げられ、母はそれらを取り除かせるが、何百という胞子のようなものが残る。そして父はそれらを顕微鏡で調べたり、写真を撮ったりして学者のように振舞うようになる。

ルーシーも母と同様に森の「あれあれ」に嫌悪を感じるが、しかし、それらを他の誰よりも詳しく知っていて、一度だけ間違っただけでそれらを食べたことがあったが、それらの臭いや味にも通じていた。

森の中でルーシーは探すことに完全に夢中になり、父よりも多く見つける。「あれあれ」の種には蛆虫、カメムシ、ムカデなど特定の小動物が寄生している。父はこの小動物について本を書くとする。特定の寄生物が寄生している主人を去った後にはその共生、卵の孵化、移動の模様が残る。ルーシーと父は「あれあれ」にどんな小動物が寄生しているか当てる遊びをする。

物語の後半はある夜に父親が突然、逮捕されるという事件で始まる。父は同じ逃亡者仲間と州知事への犯罪を計画した疑いで首都の刑務所に閉じ込められ、すぐに死刑の判決が下される。ルーシーは森に入り、例の「あれあれ」を探し、それを持って首都に出発する。途中、歩行者に出会いながら、バスに乗り、地下鉄にも乗り、喫茶店にも寄り、映画館にも入る。「あれあれ」は時間

が経っても決して形や色を変えず、匂いと輝きを失わない。

人々は徐々にルーシーが腕に抱えているものに気づく。最初、人々はそれらを見て何も言わないが徐々にそれらを見て懐かしさを感じ、感激する。かれらはすでにそれらについて詳しく知っていることが判明する。刑務所の監視人たちもそれらを見て表情が変わり、それらとのかかわりを思い出す。皆、「あれあれ」について話し始め、意見が一致する。

州の知事である王様はそれらを見て「私の好物で命の食べ物だ」という。そして王様は父とその仲間たちに恩赦を与え、母を一日女王にする。王様はそもそも死刑を廃棄し、死刑囚を皆、解放する。

父、母、ルーシーは王様に用意された陸路も水路も走る特別な船で家に帰る。最後は家族が家で朝食をとる場面で終わる。

1. 「あれあれ」とは何か、その役割

この物語のタイトルには Dingsda という言葉が使われている。この言葉は話し手が瞬間的にその名前が出てこない人や物を指す言葉であり、あるいは名前を知らない人や、それをはっきり名づけようとしないうる物を示す言葉で日本語の「あれあの人」、「あれあれ」を意味している。この物語では父親が森の中で採取し、次々と家に持ちこみ、家中を一杯にするものが「あれあれ」と呼ばれている。森に成育しているもので、宝物、収穫物、ぼろぼろのもの、くずのようなものとさまざまな呼び方をされている。それらは最初、心をさわやかにするものだが、すぐに新鮮さを失い、形がくずれ、色をうしない、黒く収縮し、カビで覆われてしまう。しかし、それらは食べることが出来、おいしいのは確かである。実際、母とルーシーはたまたま、それらを味見した時、おいしいとを感じるのである。

この「あれあれ」は名づけられないものとして描かれているので具体的に何を意味しているのかは明確ではなく、また Pilz(キノコ)という言葉は使われていないが、しかし、ほとんどの人々がそれらを見て懐かしく思うことから考えると、様々な種類のキノコが想定される³⁾。

ルーシーは「あれあれ」を森で見つけ、それを携えて首都の刑務所にいる父をたずねる。「あれあれ」に最初、誰も気づかないが、その後、皆に気づかれ、幼年期の共通体験として皆の気持ちをなごませる。州知事の王様として偽の王様と本当の王様が出てくるが、最初の王様はそれを見てしかめ面をする。それによって自分が偽者であることを暴露し、もう一人の王様はそれを見て「私の好物で命の食べ物だ」と言い、本当の王様であることを証明する。真の王様は父やその仲間、死刑囚、皆を釈放する。「あれあれ」はケンカしているカップルも一時的に仲直りさせ、人々の幼年期の共通体験として人々の意見を一致させる。つまり「あれあれ」は人が子供のころ、皆、知っていたものとして人々を和解させ、一緒に結びつけるもの、平和をつくりだすものとして描かれているのである。

「かごの中の物たちはおよそ、そういうものがあるとするならば、無実を証明するものだ。これ

らの物は手榴弾あるいはその他何かに対するまさしく対立物なのだ。」(85)

ルーシーの家は首都の郊外にあり、その背後には森がある。つまり、ハントケは物語の舞台を都会と自然の境目に置いている。そして自然の産物を携えてルーシーは都会へ出かける。自然の産物である「あれあれ」は都会の人々に懐かしい感情を引き起こし、それは人々を和解させ、一つにする力を持っている。

「私、君、彼、彼女、それ、私たち、君たち、彼らはかつてずっと昔、このような物と関わりがあった。ただそれを忘れただけだった。そして今、私たちは、君たちは、彼らは再び、思い出した。あ〜、むかし、森で、大きな空き地で、祖父や姉や兄弟たちと一緒にそれらを見つけたっけ！刑務所の遮断機の監視員たちは皆、興奮して入り乱れて話した。ただ一つの話題しかなかった。やっと共通するテーマがあった。互いに争うのではなく、意見が一致し、興奮するようなテーマが見つかったのである。」(80)

お互いに無関心に、あるいは争いながら生きている人々の現実には自然の産物である「あれあれ」が持ち込まれる。「あれあれ」は我々がかつて幼年期に体験した世界として我々を一つに結びつける役割を果たすのである。

2. 森と都会からの声、音

森と都会の中間に位置するルーシーの家には森や都会からいろいろな鳥の声、音が聞こえてくる。町から聞こえるざわざわ、ごうごうという音、海から聞こえてくるフェリーのポーポーという合図の音、夜が明ける前の森から聞こえてくるフクロウのポーポーという鳴き声、その後のハシボソカラスのガアガアという声、そしてフクロウとハシボソカラスの声が重なり、すれ違い、お互いに応えあっている声が聞こえてくる。ルーシーが通学バスの停留所に行く途中に、今度は森の猛禽、特に鷹の鳴き声が聞こえてくる。鷹の声をどう表現するかが家族の中で話題になる。「キーキー」、「ガアガア」、「ピーピー」、「ピューピュー」、「ラーラー」「ハーハー」など母、父、ルーシー、隣の子供のウラジミールがそれぞれ鷹の声を表現し、この話題が皆を一つに結びつける。

森の鳥の様々な鳴き声、都会からの音、それは雑音として耳に入ってくるのではなく、楽器の演奏のように享受され、体験される。森の「あれあれ」の存在に気づくことによってその話題で人間同士が結びつくように、森や都会の音の存在、その表現についての話し合いも人と人を結び付ける。クラウド・アマンはハントケの文学の本質を次のように述べている。

「我々にとって見慣れているもの、端にあるもの、見過ごされているもの、軽視されているものが本当は我々の世界を構成しているものだということ、それらが話題に値するもの、記録し、語る価値のあるものとして明確化することをハントケは試みているのだ。目立たない物の中の特殊なもの、一見見慣れたもののの中の新しいもの、そういうものに対して我々読者の目、耳、心を開かせようとしているのだ。」⁴⁾

3. 「あれあれ」の共存形態と家族の共存

ハントケは90年代から現在に至るまでセルビア紀行など多くの作品を通して旧ユーゴスラヴィアの分裂解体やスロヴェニアなどの民族独立に対する疑念、特にヨーロッパメディアの一方的で偏向したセルビア批判に反対する立場を明確化し、多くの論争を引き起こした⁵⁾。ハントケの立場は旧ユーゴスラヴィア分裂解体という歴史的現実逆行しているが、諸民族の独立、国家形成よりも民族の共存を支持している⁶⁾。こういったユーゴ、セルビア関連の作品と比べるとこのルーシーの物語は現実の政治問題とは関係のない子供のためのメルヘンの世界を描いているように思われるが、しかし、まさしく願いや夢が叶えられるメルヘンの世界を通して紛争と分裂の現実世界に対するハントケの理想とする平和で共存の世界が作り出されていることは確かである。

森の「あれあれ」には色々な種があり、それぞれの種にはその種に対応する特定の蛆虫、カメムシ、ムカデなどの小動物が寄生し、住みついている。これらは小動物民族として描かれている。ハントケははっきりと「あれあれ」の共生形態を通して旧ユーゴスラヴィアの国家形態を描こうとしているわけではないが、旧ユーゴスラヴィアの各民族の共存形態が反映しているように思える。自然の生物がお互いに共存して、寄生して生きているようにかつて旧ユーゴスラヴィアも様々な民族が共存していた。ハントケは共存国家が分裂し、それぞれの民族が独立して一つの国家を形成することに対して、特にスロヴェニアの独立に対して反対であった。

「あれあれ」の共生形態、旧ユーゴの共存国家形態について言えることはルーシーの家族についても当てはまる。国家の共存と同様に家族もお互いに依存し、支えあいながら、ばらばらになることなく、一つに結びついていなければならないという考えがこの作品を貫いていることは確かである。家族三人の結びつき、父と母、ルーシーと父、ルーシーと母の関係がさまざまな角度から描かれている。まず、父と母の夫婦関係を見ると、かれらは色々な点で全く正反対な人間として描かれている。

ルーシーの母は郊外の町で警察署長として勤務し、家や庭でも警察官の制服で仕事をする。母は美人でルーシーがお母さんの幅広い肩に守られているように感じるほど頼りがいのある人間である。将来は政治家になろうとしており、物語の最後では一日女王になる。母はまた指導力を備えた人間であり、ルーシーは母の「決めるのは私」というモットーを引き継ぎたいと思っている。ルーシーが母親について唯一、好きになれない点は母親が犯人を逮捕した時など、帰宅すると家の中でどこでも大声で歌いだし、しかも間違って歌うことである。

一方、父は庭師で母と比べると全く頼りなく、存在感の希薄な人間である。家を訪問する人には父は何かの仕事で来た外部の人間とみなされ、父親としては見られない。父はルーシーをいつもうんざりさせ、ルーシーにとってはわずらわしい存在であり、話す時も短く簡潔に表現できずに、いつも回りくどい長々した文章しか言う事が出来ない。また、落ち葉の落ちていない庭を掃いたり、歩いていると突然、振り返り、母がドアを閉めた後にまたそっと閉めるなども父の行動

はルーシーには不可解である。父は森を歩き回り、森に住んでいるカタツムリ、カブトムシ、毛虫などを服につけたまま醜惡な姿でルーシーの部屋の前に立ち、くさい臭いを発散させる。また、父は森から蜘蛛、虫、色々な小動物を家に持ち込み、母はそれに耐えられなくなり、家からそれらを排除する。結局、父は自慢すべきことは一つもないような人間である。

「美しい、力強い、たぶん、これからもっと強くなる母親と比べるとこの人間はむしろ、役立たず、出来損ないだった。」(22)

母は美しく、頼りになり、決定力があり、いつも堂々として自信に満ちている。他方、父は醜く、いつも震え、簡潔に表現できずに長々と話し、不可解な行動をし、存在感がない。このように父と母の極端な違いが強調されている。何がこの二人を結び付けているのかが分からないような夫婦である。しかし、ルーシーはこの不釣り合いな二人が一緒にいる姿を好ましく思う。母の美しさは圧倒的で、父は母と一緒にいることで母の美しさで一緒に輝く。母の美しさは父の存在の欠陥を覆う。

「ルーシーの目にはこの二人は一緒にいると明らかに美しい、すばらしいカップルだった。ルーシーは父と母がお互いに一緒にいて欲しかった。彼ら二人と、まさしく、唯一この二人と一緒にいたかった。彼女はそう望み、そうなることを要求し、そうなることを主張した。」(23)

ルーシーは時々、二人の手を強引に結びつけ、別れないことを望む。

他方、ルーシーも父母の同伴を必要であることが強調される。

「羽のように軽くなった子供の足で険しい傾斜地を突進することはとても楽しかったにもかかわらず、ルーシーは自分と一緒に歩いてくれる人、そして特に彼女を見守ってくれる人が必要だった。誰でも良いのだろうか？ そうではない、父と母、両方を必要とした。ルーシーには父と母が必要だった。」(33)

父、母、ルーシーはそれぞれ全く異なり、それぞれが全く異なった生き方をしているにもかかわらず、お互いの依存性、必要性が強調されている。違いを超えた家族の一体化が確認される。

4. 父、母、ルーシーの好む活動場所

父、母、ルーシーはそれぞれ、全く異なった人間であるが、それに対応するかのよう、それぞれの人間が好む活動場所が描かれている。

父は当然、森を好み、いつも森の中で「あれあれ」を探している人間である。それは父が子供のころ、両親と一緒に国から国へ逃亡し、森のような場所に身を隠すことを余儀なくされたことと関係しているように思われる。また、父は逃亡者として森の中に何か食べられるものを探さざるを得なかったことも「あれあれ」を探すことと関連しているかもしれない。父がいつも体を震わせるという習慣も逃亡者として常に周囲の環境に怯えていた事から説明できるだろう。また、いつも人の目につかないように身を隠していた過去が存在感のない父親を生み出したのかもしれない。森の中で澆刺として歩き回る父親は一方、家の中や町の道路やバスの中でルーシーと一緒に

の時、いつも震えている。家族で高山に出かけた時、木々がなく岩や草しかない場所で身を隠すことが出来ず、どこに行ってもよいかわからなく、途方にくれる。

一方、美しく、頼りがいのある母は刑事警察署長として郊外の都会に勤務し、家に帰ってくる時はドアの取っ手を下ろすことなく、ボタンと大きな音を立てて締め、いつも大声で間違った歌を歌うような常に目立つ存在である。母は父親が森から持ってくるものには最終的には耐えられなくなるように森の世界とは無縁である。父親がかつて逃亡者として追われる人間だったとするならば、母は追跡する人間であり、物事を自分が決定しなければならないと考える人間である。将来、政治家になることが母の夢であることから考えると、母は多くの人の上に立ち、人々を動かせるような都会を好んでいる。しかし、強い人間である母親も父親と同様、高山では全く、変わり果て、しわだらけの老婆のように小屋に閉じこもったきりである。彼女は無線の周波数の届かない山の中では左遷された人間のようにになってしまう。

ルーシーは森の近くの郊外の家を好まず、首都の険しい海岸沿いの景色の良い家に住みたいと思っている。父親の好む森には洞窟、滝、岩がなく、きちんとした道はなく、切通ししかなく、白樺が多く明るすぎて、どんぐりが落ち、栗の実が落ちてくるので嫌う。ルーシーは高山では水を得た魚のように活動する。とくに樹木がほとんどなくなる樹木生育限界が好きで、短い草とむき出しの岩しかない場所でルーシーは跳ね回る。ルーシーの好む場所は高山のような開かれた土地、海が見える景色の良い場所である。視界をさえぎることのない自由な遊びの場所であると言えるだろう。

5. 森の中のルーシーと父親

ルーシーは美しく、頼りがいのある母親に憧れ、森から色々な物を家に持ち込み、不潔な父にはうんざりしているが、あるとき、父に森の「あれあれ」の世界に連れて行かれる。その時、ルーシーは父親が「あれあれ」を探している時、別なものとよく思い違いをし、その思い違いしたものからすぐに離れるのではなく、その周りを歩き、またそれを虫眼鏡ですっと見ていることに気づく。ルーシーは父の探し方が間違っていると思い、父を責めると彼は次のように答える。

「私はここで探しているものをそれとは違うものと混同することによって、この混同された石、葉、樹皮、根、苔を改めて見直す機会が与えられるのだよ。そういう機会是我的混同、私の誤謬なしでは生まれなかっただろう。結果として今、この混同されたカタツムリと、他方、私の探し求めていたもの、すなわち、カタツムリと混同したものがより正確に、より鋭く私の目に入ってくるのだよ。混同されたもの、この場合、カタツムリが私の目の前に直接現れるが、他方、あの探し求めているものは私の精神的、内面的な目の前に現れるのだよ。いま、二重に鋭くなった視点を基にして(存在しているものへの外的な視点と存在していないものへの内的視点)、この二つは最終的には一緒になって次のような見方に通じることになるのだよ。それは哲学者であり、科学者でもあったピタゴラスが誤謬観察と名づけ、世界の事物を互いに比較し、互いに区別し、そ

それぞれの個別的なものの本質特徴を認識するための最も自然で最善の方法として彼の弟子たちに勧めた観察方法なのだよ。」(56)

いつも長々と不可解なことしか言わない父親が物の見方についてこのような哲学的考察を述べていることは少し不自然だと言えるかもしれない。しかし、この発言はハントケの典型的な物の見方を表している。ハントケは過去の作品において何度も我々の日常生活における自動化された物の見方、生き方を打破することをテーマにしてきた。そしてここで提示された見方も我々の通常の物の見方を批判し、それを超えようとしている。

父親はここで二つの対象について述べている。一つは彼が探しているものであり、もうひとつはそれと混同されたものである。この混同を通してそれぞれの物がより、鮮明に認識されることを述べている。目の前にある混同されたものは本来探しているものとの違いにおいて鋭く認識され、また、本来探しているものも目の前のものとの違いを通して鮮明にイメージされる。ルーシーにとっては不可解でうんざりする存在であった父が意外にも物事に対しての深い洞察力をもっていることが判明する。ここで父親はルーシーに対して啓蒙的な役割を果たしていると言えるだろう。

ルーシーは森の中で探すことに熱中し、父親よりも多くを見つける。一方、父は、探すことに熱中できず、ただ、たまたま見つけるか、何か全く別なものに熱中したときに見つける。父はわずかしか見つけられなかったことについて探す時は一人でなければならない、人といると何も見えなくなると弁解する。逃亡者仲間と探しに出かけると彼はたいてい、何も収穫なく手ぶらで森から帰って来る。父は他人と一緒にいる時はそのことに気がつかない、探すことに熱中できないのである。また、父は最後まで探すことなく、中途半端にやめ、別な方に目を向けたり、耳を傾けたりする。ルーシーがそのことを非難すると父は長い文章で次のように答える。

「野生のハトの群れよ！ 絶えず逃げ回り、ダグダグダグという機関銃のような音を立てて羽ばたき、一斉射撃やキャーキャーというような羽音を立て、雨のような羽音を残して木から木へと逃げる。でもすぐまた逃亡は中断される。木にじっと止まり、完全にじっと止まるかと思うときさらにまた逃げ始める。森の上空で灰色やブルーのかけらになる。射撃の破片ではないのか？ メルヘンの世界のかけらではないのか？ また次の逃亡の木に消える。常に小さな、小さな逃亡を繰り返し、常にその都度の少しの休息、こうして一日中、一年中、逃げ回る。同じ小さな森の中で円を描いてぐるぐる旋回している。決して逃げ終えることなく、休み終えることなく、榴弾射撃のような音を立てて羽ばたき、キャーキャーという羽音を出し、それから灰色、ブルー、灰色、ブルーの羽の落下。そして羽音以外はこれらすべての野生のハトたちからは一羽の声も聞こえてこない。森の唯一の鳥たち、まだ一度も声が聞こえてこない。呼ぶ声も、叫び声も、ガーガーという声も、逃亡のぱたぱた以外の何物も聞こえない。そのつどの違う場所へと羽を広げるほども離れていない場所へとこうしてハトたちは逃げながら生き延びる。というのは猟師たちがいつもどこかでハトたちを追跡しているのだから。逃げる鳥たちよ！ 私と一緒に仲間になってくれ！」(56, 57)

ここで父は森の鳩の群れの行動に逃亡者としての自分の過去の姿を投影している。この父親の鳩の群れの描写からルーシーが父親の不可解な行動を理解したかは明らかではないが、父がかつて逃亡者としての常に周囲に怯え、一つの場所にいられず、常に場所を変え続けた悲惨な生活が暗示されている⁷⁾。

6. ルーシーの遊戯性、物語の遊戯性

ルーシーは子供として何でも遊びにってしまう。体をいつも震わせる父を歌にして歌い、父と森の「あれこれ」を探す時、「どっちが多く見つけるか?」というゲームにして楽しむ。また、「あれあれ」に寄生している小動物が何であるかを当てることもゲームにする。ゲームにすることによってルーシーは父よりも多くを見出すことができる。ルーシーはどんなことにでもゲームのきっかけを見出し、どんな問題もゲーム(物語、韻律、歌)にになってしまう。

父と母は大人として功名心、自己顕示欲から自由になることは出来ない。いつも震え、目立たないように努力している父にも森歩きから、研究者として森の「あれあれ」について本を書こうとする功名心が生まれ、学者として振る舞うようになる。その時から母は父の「あれあれ」を家から取り除くことを決心する。また母親も犯人逮捕をした時、家に帰ってくると力いっぱい歌を歌い、そしてその歌はいつも完全に間違っている。有頂天になっている母親はルーシーの神経に触る。父や母と比べてルーシーには大人の功名心は無縁である。純粹に事物に興味を持ち、事物を認識し、遊びの対象にする。

すべてを遊びにするルーシーと同様にこの物語そのものも遊戯の精神に貫かれている。この物語の最初では主人公のルーシーが本当はルーシーという名前ではないこと、本人はテオドール、レナータ、など、別の名前を呼ばれることを欲し、そのためにこの物語ではたまたま、ルーシーという名前になったこと、また、ルーシーの実際の髪の色はブラウンで目の色はグレイであるにもかかわらず、ルーシーは黒髪、緑色の目を望んでいることが言及されている。そしてこの物語全体がそういう構造になっていることが述べられている。つまり、ハントケは最初から、このルーシーの物語は事実、現実を描くのではなく、ルーシーの願いから成り立つ虚構の物語であることを明示している。この作品のタイトルの副題の「eine Geschichte」は物語を意味するが、現実離れしたお話、作り話という意味合いが強い。物語りの後半で父親が逮捕される出来事が起こるが、その直前にこの物語そのものへの言及があり、語り手は「いつ出来事が起こるのか?」という疑問を呈示している。そしてそれまでの家族の平凡な日常生活の記述も十分、物語であり、今後は長い文章ではなく、短い文章でその後の物語を語りたいと述べている。

そしてこの物語の最後をハントケは「そして次の夏にルーシーは森の空き地の草の上に座り、この彼女の物語を読んだ。」(90)と結んでいる。

この時、ルーシーは本来の物語内容の主人公から抜け出て、自分の物語を客観的に読む人間に変わる。すなわち、それはルーシーの物語が物語として相対化され、いわば、フィクション、遊

戯となることを意味する。

「私の物語では結局、物語そのものが主人公として登場する。物語ることが偉大な遊戯 (Spiel) であるかのように語りが遊戯となり、解体する」⁸⁾

物語が単なるお話として遊戯になるからといって、そのことによって決して物語の真実性 (リアリティ) が奪われるものではない。物語世界のリアリティは本来、そうあるべき世界として事実、現実の世界に対する批判を含んでいる⁹⁾。ルーシーの物語はユーゴ紛争、人間同士の争いなど国家や社会の現実的な問題に対して一つのメルヘンのユートピアを描いているのである。

注

- 1) Peter Handke: Lucie im Wald mit den Dingsda, Frankfurt/M (Suhrkamp) 1999

本文のカッコの数字はこの作品からの引用ページを示す。

この物語のタイトルについてはビートルズのジョン・レノンの歌「Lucy in the Sky with Diamonds」(1967)との類似性が指摘されているが、この歌とハントケの作品がどのように関連しているのかは明確ではない。ビートルズの歌のタイトルは同時に「Lucy in the Sky with Diamonds」すなわち LSD (幻覚剤) を暗示している。この作品にはハントケ自身の朗読した CD がついており、また作品の中ではハントケ自身によるスケッチが描かれている。

- 2) Georg Pichler: Die Beschreibung des Glücks. Peter Handke. Eine Biografie. Wien 2002

- 3) ハントケの作品「Mein Jahr in der Niemandsbucht. Ein Märchen aus den neuen Zeiten. Frankfurt/M (Suhrkamp) 1994」(無人入り江での私の歳月) ではパリ郊外でのキノコ探し詳しく描かれている。

- 4) Peter Handke/Klaus Amann: Wut und Geheimnis. Peter Handkes Poetik der Begriffsstutzigkeit. Klagenfurt (Wieser) 2002, S. 12f

- 5) Vgl. Handke: Abschied des Träumers vom Neunten Land. Eine Wirklichkeit, die vergangen ist: Erinnerung an Sowenien, Frankfurt (Suhrkamp) 1991

Handke: Eine winterliche Reise zu den Flüssen Donau, Save, Morawa und Drina Oder

Gerechtigkeit für Serbien, Frankfurt (Suhrkamp) 1996

Handke: Sommerlicher Nachtrag zu einer winterlichen Reise, Frankfurt (Suhrkamp) 1996

Handke: Unter Tränen fragend, Nachträgliche Aufzeichnungen von zwei

Jugoslawien-Durchquerungen im Krieg, März und April 1999.

Frankfurt (Suhrkamp) 2000

日本語文献では、ペーター・ハントケ (元吉瑞枝訳) ; 「空爆下のユーゴスラビアで (同学社)」(2001年) のあとがき (201~216 ページ) を参照

斉藤松三郎著 ; 「夢のありかを求めて ペーター・ハントケ論 (鳥影社)」

(2001年) の 59~136 ページを参照

- 6) Vgl. Handke: Noch einmal vom Neunten Land. Peter Handke im Gespräch mit Jože Horvat. Klagenfurt (Wieser) 1993, S. 75

「一民族、一つの風景に過ぎなかった場所が、特に従属化されてもいなかった民族が国家になった。」

- 7) ハントケは講演でナチのオーストリア占領時代に若い人々がパルチザンとして森や山へ身を隠し、いかに孤独で窮乏し、悲惨な生活をしていたかを描いたケルンテンの三人のスロヴェニア人の作品を紹介、推薦している。

Vgl. Peter Handke Klaus Amann: Wut und Geheimnis. Peter Handkes Poetik der Begriffsstutzigkeit. Klagenfurt (Wieser) 2002, S. 49-53

8) Handke: Aber ich lebe nur von den Zwischenräumen. Ein Gespräch, geführt von Herbert Gamper. Zürich 1987, S. 84

9) Vgl. Peter Handke/Peter Hamm: Es leben die Illusionen. Gespräche in Chaville und anderswo. Göttingen 2006, S. 38

「本の中で書かれている物語は私にとっては新聞やテレビで見る出来事よりもリアルで現実的なのです。」